



只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一

指導

老いつつも農に活き来し我なれば畑に出づるは樂しみとなり

馬場 八智

木々に付く雪は日差しに丸みおび花の如きにしばし見惚るる

目黒 富子

訪ねたき話したき人思ひつつ叶はぬままに年の瀬迎ふ

関谷登美子

小春日の窓に群れ居るかめ虫の多き今年は深雪なるや

渡部ゆき子

戸惑ひて片付かぬ事多き日は箇条書きにし眺めて過ごす

小倉キミ子

仏壇に供ふる水や果物は同居の従姉が日々上げくるる

新国由紀子

ひ孫らのはしゃぐ姿に目を細めじいちゃん今日は元氣はつらつ

飯島小百合

今年こそ早めに賀状と思へども例年のごと間に合わぬなり

渡部ヨリ子

降り続き積もりし雪の多くして吹雪く窓辺にシクラメン明かし

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

一月例会

目黒十一

指導

除雪音揺れて響くや村明ける
垂れ込める雪雲刃向う杉木立

修 一

ねんねこの中にうさぎの帽子ゆれ
写されて白髪こぼれ冬帽子

都

寒飴を仕込む幸せ桶洗う
寒晴や銃声三発研して

一 穂

春出水川巾決めて流れ行く
元日や十五の月の照らしおり

洋子

屠蘇酌むや賀寿祝ぐ宰相額と杯
初写真両のかいなに抱く曾孫

吉 児

初句会終えてそば食いそば談議
雪国に誇れる日あり銀世界

弘子

ともかくも雪掻き終えて初日の出
雪見障子雪の深さの底をみる

幸 生

そば掻きや母の流儀をくずさず
軒下に薪を積み足す冬構

恒夫

ふるさとの土産を乗せて雪列車
梅一輪咲きしわが家の猫額

信

今すこし残る未来囀初山河
大ダムのたもとに仰ぎ初御空

礼